財団法人東方研究会／東方学院

東方だより

第十二号

〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
TEL 03-3251-4081
FAX 03-3251-4082
URL http://www.toho.or.jp

役員ご挨拶

理事長・東方学院長
前田 專學

『東方だより』の読者の皆様、残暑なお厳しい昨今でございますが、恙なくご活躍のことと拝察いたしております。

皆様もすでにご存知のことと思いますが、現行の公益法人制度が見直され、来る十二月一日には、新しい公益法人制度が施行されます。私たちの財団法人東方研究会も、当然、改革の対象であり、今や私たちはハードルの低い「一般公益法人」に甘んずるか、あるいはハードルは高いが、税法上の免税措置等の優遇策が適用される「公益財団法人」を選ぶかの、きわめて困難な岐路に立っております。「一般公益法人」に甘んずれば、現在受けている税法上の優遇措置がなくなり、創立者中村元先生の高邁なご遺志を継承し、発展させることは不可能ではないかと危惧されます。

そこで去る三月三日に開催されました理事会・評議員会におきまして、私たちの取るべき道をお諮りいたしましたところ、全会一致で、第二の道を選ぶべきであるという結論に達しました。したがって財団法人東方研究会は、平成二十五年十二月一日（五年間の移行期間）までに、新しい公益法人への移行を完了しなければなりません。

私たちにとって今一つの困難な課題の一つは、以前にもお話しいたしました「特定公益増進法人」（特増）の問題であります。

この寄付金に対する税法上の優遇措置を得るに必要な条件は、支出の中、事業費全体に占める研究事業費の割合が七割を越えなければならないという条件です。そのために昨年度、従来からありました賛助会員とは別に、新たに維持会員の制度を立ち上げ、皆様方にお願いして、収入の増加を目指しました。お陰様で、後で担当者がご報告いたしますように、多くの方々のご賛同を得ることができました。まことに嬉しく、ご懇情に対しまして、心から厚く御礼を申し上げます。幸い研究員に年十万円の研究費を支給することができ、優に七割のハードルを越えることができました。研究員の研究活動の充実は、東方学院の講義内容の充実を可能にいたします。

最近も、ドイツの大学で博士号を取得した研究員から、私の許に立派なドイツ語の博士論文が送られてきました。しかし、しかるべき大学の、あるいは研究所の、ポストに就くことができておらず、かつて同じような境遇を経験した私の胸が痛みます。この研究員だけではなく、当財団では、国内外で博士号を取得した研究員の数は十三名にのぼります。最近は諸大学の財政状況が厳しく、誰かが定年で辞めても補充されず、諸大学の人文科学のポストは徐々に削減される傾向にあります。それだけに就職できない有望な若手研究者に研究を続ける機会を与える財団法人東方研究会の存在の意義と責任は大きくなっております。私は、若手研究員の支えとなることが、中村先生の財団設立の重要な動機であったと直接おききしております。

私はいつも肌身離さずもっているものがあります。それは、中村先生が今から一二年前の、一九九六年十二月二十六日に、財団法人東方研究会の忘年会が行われたときの先生のご遺言ともとれる挨拶の冒頭です。

「あっという間に一年が過ぎようとしています。越後の歌人良寛に〈形見とて、何残すらん、春は花、夏ほととぎす、秋はもみじ葉〉という句があります。私の場合には、何を残すか、というと・・・一つだけ人様に言えることがあります。それは東方研究会のことですね。他の学問をしている方々とは違っていて、われわれの祖先から伝えられている麗しい純な気持ちを皆さんが伝えている。この美しい精神を遺していらっしゃるから、私の場合は、この遺偈に通ずるものがあるのです。」

中村先生の熱い思いのこもった大事な遺産であるこの財団法人東方研究会を、美しい精神を継承した新しい公益財団法人として、何としても存続・発展させて、中村先生のご念願に添いたいと願っています。どうか皆様方の今いっそうのご協力とご支援をお願いいたします。

於 新春研究発表会会場 平成20年3月11日

第十二号　目次

前田專學理事長・東方学院長ご挨拶／「脚下照顧」……1頁
新春研究発表会……2頁
決算報告と新予算／平成十九年度芳名録……3頁
研究会員の声……4頁
東方学院講師紹介……5頁
研究員紹介……6頁
平成二十年度上半期行事報告／「閑話本題」……7頁
財団法人東方研究会からのお知らせ……8頁

「星占い」

夜空に星が美しい。

星は私たちにいろいろなことを語りかけている。永遠無限の彼方に私たちの想念を運んでくれることもあるし、宇宙の神秘をかいま見せてもくれる。星に願いをかける口マンもあっていい。星と私たち人間との関係は古くかつ深い。

天体の規則正しい運行や星座の知識は古代から既に知られていた。そして窺い知ることの難しい人生の命運を星の動きと関連して占う傾向もそれに応じて発展した。占星術がそれである。洋の東西、時の古今を問わず、中国の十二宮や二十八宿にあたるものは説かれてきた。インドや西欧に於いても同様で、ホロスコープは人々の生活に深く入り込んでいる。

私はインドに長年滞在したが、ヒンドゥー教徒のホロスコープに対する信頼度はきわめて高い。そのお陰で不幸を免れた、などという話はしばしば聞かされた。

インドばかりではない。西欧でも日本でも、ホロスコープは大流行している。この種の本は売れ行きがいいというし、雑誌は金運、愛情運、仕事運、相性判断などを執拗に語っている。

人生の彩りとして楽しんでいるうちはいい。便利な「モノ」の文化の中で心のゆとりが失われ、人間の夢と情感が求められている時代である。非科学的だと目に角たてるほどのことでもない。

しかし星占いが現実の人生に暗い影を落とすようだと、これはかえって人生を後ろ向きにする。娘が望んでいる結婚を星回りが悪い、不幸になる、と主張して破談にした親の話を先日聞いた。頑迷な親を説得できなかったものか。自分の人生は自分の責任において切り開いていく強さがなければなるまい。

この点、仏典の合理主義的な思考、割り切り方は見事である。

星を眺めて吉凶を占う愚か者に幸福はこない。
幸福である時に、幸福の星座にいるのだ。
星、何をかなさん。（『ジャータカ』四十九話）
（奈良康明）

脚下照顧

新春研究発表会

三月十一日（火）、東京都文京区の東京ガーデンパレスにおいて、毎年恒例の当会主催の新春会が、今年からは名称を改め「新春研究発表会」として開催されました。

会は二部構成で、先に行われた研究発表では、当財団の前田専學理事長からのご挨拶に続いて、当財団の清水晶子研究員による「デリーのジャイナ教徒のコミュニティー」と題する研究発表と、国際仏教学大学院大学学長・日本印度学仏教学会理事長の木村清孝氏による「これからの東アジア仏教研究に望む」と題する研究発表とが行われました。

その後、会場を同施設内の別室に移して、百名近い方々のご列席を賜り、和やかな雰囲気の中、懇親会が開催されました。その席上で、研究会員の田原豊道氏、小野俊彦氏より祝辞をいただきました。

「これからの東アジア仏教研究に望む」

木村 清孝

（国際仏教学大学院大学学長）

筆者はまず、日本の仏教研究の歴史を振り返り、宗学を中心とする近世（江戸時代）までの日本型と、文献学を中心として発展してきた近代（明治時代）以降の西欧型の仏教研究に分け、それらの概要を紹介した。

ついで、世界の仏教研究が、いまどのような状況にあるかを論じた。主な論点は、①西欧における文献学的研究の衰退、②東アジアにおける、現代の諸問題との関わりへの関心に発する応用的研究の興隆、③南方仏教圏における伝統の根強さ、などである。中でも、中国・台湾における新たな動きとして「人間仏教」が広く提唱されていることに注目すべきことを指摘した。

最後に、これからの仏教研究のあり方について、筆者の見通しと期待を述べた。大きな問題は三つある。第一は、現在、衰退の傾向にある文献学的研究を何としても再活性化させなければならない、ということである。というのは、「テキストを精確に読み解く」ことを目指す文献学は、常に仏教研究の基盤でなければならないからである。第二は、比較思想的研究の推進である。日本における比較思想の伝統は、本研究会の創始者である中村元先生らが礎を築かれたものであるが、とくに、ほとんど仏教に接し、仏教について見聞する機会がない西欧の有識者たちに仏教についてよく知ってもらうためには、このような研究にもとづく成果の発信ほど有効なものはないであろう。第三は、いわば「応用仏教学」の構築である。「新仏教論」の提唱と言い換えてもよい。要は、環境の問題、生命倫理の問題をはじめとする現代社会が抱える諸問題に対して、仏教の思想にもとづき、あるいは仏教研究者としての主体的立場から、新しい仏教体系を作り上げることを目標として、積極的に発言していくことが大切ではないか、ということである。これはまた、先に述べた「人間仏教」流布の動きと連携することが可能であり、また必要でもあろう。

さらにいえば、上記のようなあり方を実現していくには、仏教学界と現場を担う仏教界との交流を促進し、正確な情報の交換をすること、そして、日本に「世界仏教情報センター」といったものを設置することも欠かせないと考えている。

「デリーのジャイナ教徒のコミュニティー」

清水 晶子

（研究員）

ジャイナ教はインドにおいて古い歴史を持ち、仏教と同様非バラモン系統に属します。二〇〇一年の国勢調査ではジャイナ教徒の数は全インドで四二〇万人（人口比〇．四％）あまりで、その大半が商業（金融業・小売業・宝石業・会社経営等）に従事しています。

デリーの信徒は、総人口の一．一％にあたる約一五万五千人を数え、インドで七番目の規模を占めています。そして、デリーのジャイナ教徒のコミュニティーの存在が記録として残っているのは、世紀ムガル王朝シャージャハーン王時代（在位一六二七-五八）に空衣派が一六五六年に建立したLal Mandir（赤い寺院）によって知られます。また、十九世紀には王宮の門前町において空衣派を中心に有力なコミュニティーとして政治・経済的地位を確保していました。

デリーでは少数派に属する白衣派尊像崇拝派コミュニティーの多くは比較的新しく形成され、オールドデリーの周辺部、郊外に寺院を建立しています。その中でループナガル・コミュニティーは、一九四七年の分離独立後、パキスタンより難民として避難して来たジャイナ教徒が一九六一年に寺院を建立し、白衣派尊像崇拝派信徒の中心的役割を果たしています。パキスタン、パンジャブにおいて白衣派尊像崇拝派の復興に力を尽くしたVijaya Ananda（一八三六-九六）、その弟子のVijaya Vallabha（一八七〇-一九五四）の両師に対する尊崇の思いから両師の系統の僧団を物質的に支援し、宗教的指導を受けています。

両師の編纂したテキストが寺院や家庭における祭祀・儀礼の際の指針とされ、他の系統の僧団のテキストは用いません。個人、家庭レヴェルではほとんどの祭祀・儀礼の方法は宗教的知識の程度や一般の習慣に従って自由に行われていますが、公式の祭祀・儀礼はテキストに則って正確に実践されています。

ジャイナ教僧団と信徒の密接な関係は、テキストを用いて儀礼というかたちをとり、信者のコミュニティーの再生と連体を担う役割を果たしています。

田原 豊道

（日本ヨーガ学会会長）

私の自慢話が一つあります。昔、シカゴで万国宗教会議が開かれました。その時、スワミ・ヴィヴェーカーナンダという若きヨーガ聖者が大獅子吼し、それが機縁となりまして、国連の機関の一つであるＩＡＲＦという団体が生まれ、世界の宗教者や哲学者が集まって三年ごとに大会が世界各国で開かれてきました。

ちょうどその一〇〇年後に当たる年（一九九三）に私が日本チャプターの委員長を引き受けさせていただいていました。インドのバンガロール、日本の伊勢神宮で大会が行われましたが、その時、中村元先生にご講演をいただくことができたのです。それは、財団法人東方研究会・東方学院の一研究会員であったということで中村先生が私を覚えていてくださったからでございます。

さて、今年はフェノロサの再来といわれるバーバラ・ルーシュ博士が仏教伝道文化賞を受賞されたというお話を、先ほど前田専學先生よりお聞きしました。今年はフェノロサ没後一〇〇年の年になります。私もフェノロサ学会の一員なのですが、そういう記念の年にフェノロサの再来といわれる方が日本で表彰されたということにも不思議なご縁を感じます。

小野 俊彦

（日新製鋼取締役会長）

私は東方学院の「仏像彫刻」の実技を勉強させていただいております。今日は新春のお祝いとして話をさせていただきます。

この東方学院の素晴らしさは、折にふれてＰＲさせていただいており、「東方学院の手引き」にも書かれておりますように、講師と会員との人間的連絡が緊密で、懇切な指導をしてもらえる事と、講師の奉仕的な指導ぶりは、日本のどの大学よりも上廻る事を実感致しております。

東方学院には、現代の寺子屋としての初心を忘れずに、今後も愚直な運営を希望しております。運営につきましては、今年の十二月一日より公益法人の法改正があり、普通の財団法人になるのか、公益優先の法人になれるのか、税金の取扱いも異なってくるようですので、寄付に税金のかからない体制づくりをしていただければ、末長く、東方研究会が発展していけることと存じます。

［＊次頁上段に続く］

当社は、鉄鋼業における五番目の高炉メーカーとして、主にステンレスでお客様のご愛顧をいただいております。

将来は成長するインド市場への投資を検討しており、昨年も二度インドへ行って参りましたが、インドは本当に発展途上にあると実感しています。

仏像彫刻講座は、年に一回、中村先生のお陰でインド大使館で展覧会を開催させていただいており、今年も十一月には開催できることを期待しております。私はただいま申し上げましたように、インドとの関係が少しありますので、親しみを覚えております。

それでは、東方研究会ならびに東方学院の益々のご発展を祈念致しまして、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

決算報告と新予算

主事　堀内　伸二

『東方だより』紙上、昨年八月に始めてご報告をして以来、会計報告は今回で二回目となります。そこで、平成十九年度決算ならびに平成二十年度予算に関し過年度との主な相違点を中心にお伝えすることに致します。

相違点の第一は、「寄附収入」と「科学研究費補助金収入」の増額にともない、決算、予算ともに収入総額が三〇〇〇万円を超えたことです。

巻頭の理事長挨拶にございます通り、十九年度より新たにスタートした維持会員制度に、予想を遥かに上回る多くの方々がご賛同下さり、十九年度決算の特点で、すでに予算額を超えるご寄附を頂戴し、更に二十年度予算では、今年度よりご寄附を開始して下さることが確定している方々のご寄附総額として四〇〇万円を計上させていただくことができました。また賛助会費についても、賛助会員から維持会員への移行に伴う賛助会費の減額を見込んで編成した十九年度予算額を大幅に超えるご寄附を頂戴することができました。

「五濁悪世」の予言の通り、人心悪化の諸現象を日常的に目の当たりにする今日、「東洋思想の研究と普及」という財団の目的に基づく、広く人々の益となる着実な事業を、新たに多くの方々がお認め下さり、新制度開始の初年度において、これほど多くのご寄附を賜ることができたことを本当に有難く、感謝申しあげる次第です。

その尊いご寄附を活かすべく研究事業が着実に行われている一つの指標ともなる科研費採択が、十九年度は四件あり、財団収入となる「間接経費」が二四〇万円交付されたことも財団収入増加の大きな理由です。財団経理上、科研費の扱いについては、所轄省庁の指導の下、これまで二転三転して参りましたが、平成十九年度より基盤研究に関しては、すべての研究に対して、間接経費（直接経費の三〇％）が交付されることになり、財団収入として計上されることになりました。

一方、支出については、研究事業の更なる展開と、財団を取り巻く外部環境の変化に対応するため、十九年度より新設された、研究員に支給される「研究費」が、決算で三〇〇万弱、予算では四九〇万円計上されることになりました。結果として、十九年度決算において、研究事業費の総額が、総事業の七十六％を超えることとなり、特定公益増進法人認定基準として財務省が設けている七〇％を大きく上回る結果となりました。

ただ、事業費比率が相対的に低くなったからと言って、財団事業の二本柱の一つである「普及事業」が低迷しているわけでないことは、「東方だより」の記事を通じてもご了解いただけると思います。

今日の社会状況を踏まえた法人の見直しに伴い、本年十二月よりスタートする公益法人制度改革においては、主務官庁制は廃止され、内閣府に設置された「公益認定等委員会」に委ねられることになり、認定のハードルが高くなる「公益財団法人」の公益認定の要件には、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するものである「公益目的事業」を行なう事が含まれています。中村元初代理事長は、財団設立に際して、時の状況を鑑み、東洋思想を単に「研究」するばかりでなく、それを「普及」させることを大切にし、設立当初からその目的遂行のため着実に事業展開され、それが継承され今日に至っています。夙に「公益を目的として設立する財団は、本来社会のために何をなすべきか」を見据え、「東洋思想を広く普及する」ことを目的に詠い、私費を投じて財団を設立された先見性と、その理念の高邁さを思わずにはおられません。

この財団は、一貫して不特定かつ多数の方々の利益の増進に寄与する普及事業に力を注いで参りましたが、公益法人制度改革を前に、経理上の事業費比率をながめつつ、現代社会における当財団の存在意義を再認識する次第です。

平成19年度貸借対照表

平成20年3月31日現在　（単位：千円）

資産の部 科目	金額
流動資産	15,836
現金預金	15,490
運用有価証券	184
未収金	162
固定資産	290,707
基本財産	112,653
建物	8,801
土地	23,887
有価証券	79,965
基金	177,754
研究所建設基金	168,254
日本仏教史研究基金	9,500
その他固定資産	300
資産の部合計	306,542

負債の部 科目	金額
流動負債	10,107
仮受金	8,657
未払金	1,450
固定負債	0
負債の部合計	10,107

正味財産の部	
正味財産	296,435
うち基本財産	112,653
うち当期正味財産増加額	-10,239
負債及び正味財産合計額	306,542

役員会　平成20年5月20日

平成20年度　収支予算書

自 平成20年4月1日 至 平成21年3月31日

【収入の部】（単位：千円）

科目	当年度	前年度	増減
財産運用収入			
基本運用財産利息収入	3,650	3,000	650
会費収入			
普通会員費	1,500	1,600	-100
普及事業収入			
東方学院	15,350	15,350	0
学術賞	150	200	-50
新春研究発表会	400	500	-100
寄附収入			
賛助会費	2,000	1,000	1,000
維持会費	4,000	3,000	1,000
大阪後援会会費	800	800	0
一般寄附等	1,300	2,500	-1,200
補助金収入	2,400	0	2,400
その他収入	200	400	-200
当期収入合計	31,750	28,350	3,400
前期繰越収支差額	11,000	21,000	-10,000
収入合計	42,750	49,350	-6,600

【支出の部】（単位：千円）

科目	当年度	前年度	増減
事業費	25,050	23,950	1,100
研究事業費			
研究費	4,500	4,900	-400
特定研究推進費	840	1,540	-700
文献購入費	100	100	0
研究成果公開費	1,600	2,100	-500
人件費	12,000	10,000	2,000
学会費	60	60	0
雑費	300	50	250
普及事業費			
東方学院	4,450	4,200	250
中村元東方学術賞	850	700	150
新春研究発表会	0	600	-600
宗教文化の旅	150	150	0
講演会開催・協力	0	0	0
雑費	150	100	50
国際協力費	50	50	0
図書の贈呈・配布	0	0	0
管理費	6,097	3,340	2,757
基金取得支出	0	10,000	-10,000
予備費	600	1,000	-400
当期支出合計	31,747	38,290	-6,543
当期収支差額	3	-9,940	9,943
次期繰越収支差額	11,003	11,060	-57

平成19年度　収支計算書

自 平成19年4月1日 至 平成20年3月31日

【収入の部】（単位：千円）

科目	予算額	決算額	差額
財産運用収入	3,000	3,091	91
会費収入	1,600	1,225	-375
普及事業収入	16,050	16,453	403
寄附収入	7,300	7,527	227
補助金収入	0	2,415	2,415
その他収入	400	129	-271
経常収益計	28,350	30,840	2,490

【支出の部】

科目	予算額	決算額	差額
事業費計	23,950	25,109	1,159
研究事業費	18,750	19,235	485
普及事業費	5,150	5,874	724
・東方学院	4,200	4,346	146
・中村元東方学術賞	700	854	154
・その他雑費	250	674	424
国際協力費	0	0	0
管理費計	3,340	4,470	1,130
基金取得支出計	10,000	11,500	1,500
予備費計	1,000	0	-1,000
当期支出合計	38,290	41,079	2,789
当期収支差額	-9,940	-10,239	-299
次期繰越収支差額	11,060	5,554	-5,506

平成十九年度　芳名録（五十音順・敬称略）

維持会員

赤井士郎　足利学校事務所　吾妻秀子　今西順吉　小笠原勝治　金田泉　川崎信定　（財）京都仏眼協会　久保継成
黒川文子　小泉守邦　在家仏教こころの研究所　清水谷善圭　釈悟震　㈱春秋社　淳心会（日野紹運）　菅原信海
鈴木一馨　高崎直道　高松孝俊　竹村牧男　田村晃祐　千葉よし子　中央学術研究所　東洋哲学研究所　常盤井鸞猷
法清寺　奈良康明　西岡祖秀　保坂俊司　前田専學　前田式子　三友量順　矢島道彦　安本利正

賛助会員

秋葉佳伸　阿部敦子　有馬頼底　石井義長　一島正真　稲垣光江　稲葉珠慶　入井善樹　石上智康　遠藤康　大井玄
大谷光真　岡崎英雄　小笠原隆元　奥田清明　小野俊彦　金田静江　北村彰宏　窪田成円　小泉宗之　小林節子
小峰立丸　金剛院仏教文化研究所　斎藤明　桜井俊彦　島田外志夫　須佐知行　大海修一　㈱大東出版社　高野英二
高橋尭昭　高橋審也　田上太秀　武田浩学　田丸守也　田村久雄　千綿道人　角田泰隆　鶴谷志磨子　㈱展勝地（軽石昇）
中田直道　長野市南長野仏教会　中村行明　成田山新勝寺　西尾秀生　西宮寛　西村心華　長谷川恵子　花岡秀哉
濱川量子　濱川香雅里　浄土真宗東本願寺派本山東本願寺　日隈威徳　久富幸子　一月正人　深井秋子　藤田宏達
藤山覚一郎　堀越教之　的場裕子　往生寺（水野善朝）　三友健容　山口惠照　山本文渓　吉田魚彦　吉田宏哲
吉原喜一郎　渡部信

東方学院後援会

今宮戎神社　大神神社　奥田聖応　（学）清風学園　加藤公俊　古泉圓順　坂本峰徳　四天王寺　四天王寺大学　高口恭典
瀧藤尊教　瀧藤尊淳　健代和央　塚原昭應　塚原亮應　出口順得　出口隆順　唐招提寺　東大寺　念法真教教団
長谷川霊信　平岡英信　廣瀬善重　南谷恵敬　宮崎光映　三宅光雄　森田禅朗　森田俊朗　山口惠照　吉田明良

御寄付

吾妻秀子　石井義長　入江伸二　小野俊彦　亀山祥之　木村清孝　（財）克念社（風間真一）　小林節子　小山典勇
末木文美士　末木みえ　髙野英二　高松栄子　田中敬一　田辺和子　田丸守也　津田眞一　中田直道　西宮寛　久富幸子
三友健容　三友量順　宮崎重信　葉阿月　渡部信

皆様からのご支援に心から御礼申し上げます

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　財団法人東方研究会

研究会員の声

古橋 優子

十年ほど前のことでしょうか。三月のある日、東方学院に立ち寄る機会を得ました。以前から、インドというあらゆるものを受け容れ内包する世界に興味と憧れを抱いていた私は、釈悟震先生のお人柄と各講座について熱心に説明して下さった親切な心に触れ、四月から学ぶことにしました。今では、偶然によるこのようなご縁を本当にありがたく思っております。

東方学院では、主にサンスクリット語を受講しております。語学を学ぶことでその文化圏の人々の思考方法や過程を知ることができると感じていたからです。現在は有賀弘紀先生の「ヨーガ・スートラ」と「ラグ・ヴァンシャ」を学んでおります。有賀先生のサンスクリット語、内容解説の奥深さ分かりやすさは言及するに及びませんが、原文を理解する上で、今とは全く別物であろうかの地の時代背景などの説明を伺えることは、直接講義を拝聴させていただける冥利だと思っております。そこから、当時のインドの風景、音、匂い、温度などに想い巡らすことは楽しいことであり、原文理解の助けになります。また、他の研究会員の方々と学ぶことによって、自分の思考の癖を発見したり、はっと閃くように「何かが分かった」という気付きの愉しさを味わっております。

インド文献にみられる「宇宙と人間(衆生)」との関係、万物の生き物に対する慈しみ、一つの語に相対する意味を含む語があることなどから、諸行は無常と言われますが、変わらない何かを感じます。それは、私達にとって、大切なものではないかと思います。

東方学院では、席を同じくした研究会員の方々の熱心な学習意欲にも励まされ、萎えてしまいそうな〈わかりたい〉という思いを繋いでおります。煩雑な日常と仕事に追われながら、〈継続は力なり〉を心に、現在でも東方学院で学ぶ有益な時間を送らせていただけることに感謝しております。

久保田 栄造

私は、大正十四年に生れ、間もなく八十三歳になります。学生時代は家族一同、中国東北部（旧満洲国）の満鉄関係の軍需産業の幹事をしており、私は静岡市で祖父母の許に預けられておりました。

私の家は、臨済宗妙心寺派の檀家であり、父は禅宗に関心を持っていました。私が今日、佛教徒として日常生活を安堵して暮らしておりますのも、子供時代からの熏習であると感じております。このような縁が、導師中村元先生のインド思想史を通じて東方学院に学ぶことになったと思います。

そして、十八歳の時に読みましたショーペンハウエル『意志及び心識としての世界』の、インド思想に心ひかれて以来、インド思想の勉強を本格的にしたいと念願しておりました。少年期・青年期は第二次世界大戦の時代でしたから、勉強する環境ではなく、書物も入手困難、明日の命もいつ失われるか、前途暗澹たる時代をすごして参りました。

敗戦後は、生活のため、会社勤めをして七十歳まで働いて参りましたが、現在は、念願かなって東方学院で中観思想を受講いたしております。

導師中村元先生に御指導賜りましてから十数年を閲し、常々思いますのは、道元禅師が中国において、如浄禅師に拝眉の砌の言「これ人にあうなり」です。

私が、今日まで学院において勉学を続けることできたのは、全く中村先生のお陰でございます。

大手町ビルの五階であったかと思いますが、満員に近い聴講生にむかい、先生が佛教伝来のため、不惜身命の『法顕伝』など、お話し下さいました。又、中村先生が庠主となられました砌、足利学校のバス日帰旅行に御案内されまして、宋版の『周易注疏』を特別に手袋をしながら手にとって拝観出来た事、第七代庠主の墓を拝んだ事など思い出しております。

十数年にわたり諸先生につきまして御懇篤な御指導を賜りました。現在おぼつかない乍ら、サンスクリット・チベット両語を読めますのも東方学院通学のお陰と思っております。

吉原喜一郎

四十年ほど前、仕事でネパールに駐在していた時分に「ネパール人はものを数えるのに仏語と独語をチャンポンに使うのだ」と聞かされました。なるほど、確かに五から一〇などは仏語や独語にそっくりです。後で解るのですが、それもそのはずでネパール語は仏語、独語の祖先にあたるサンスクリット語の直系の言語に当たるのだそうです。

こうしたことがきっかけとなりインドとヨーロッパの言語の比較に興味を覚えた私は、梵語を学ぼうと思い立ち、一九九五年春、中村元先生の面接を経て東方学院に学ぶ機会をえました。以来、水野善文、上村勝彦、三枝充悳、有賀弘紀、服部育郎の諸先生方の教えを賜りながら今日に至っています。

今年はねずみ年です。ねずみは梵語、ギリシャ語、ラテン語ともmusで、これは梵語の語根√mus（「盗む」）に由来するようです。ねずみが「盗むもの」とは、なるほど古代インド人はこの動物の本質を見抜いています。独語の動詞mausen（「盗む」）にもこの見立ての影響が残っているようであり、言葉の歴史が伺われます。

中村元選集一九巻「インドと西洋の思想交流」には、菩薩という言葉が中世キリスト教世界に紛れ込みjosaphatとなった経緯が分析されています。さらに「世界思想史」に目を移すと、古代思想、普遍思想、中世思想、近代思想にわたり東西の比較をされる中村先生のお姿が見えてまいります。先生は、宗教も哲学もいずれも人間の「思想」であり、共通の土俵の上で比較検討することこそが学問的な研究方法だと説かれ、実践されていました。

伺えば、中村先生はねずみ年のお生まれだとのこと。そうしたこともあったのでしょうか、ねずみ年の幕開けに「中村先生のご遺志を継ぎ、東洋思想の研究と普及に努めたい」と仰った前田学院長の新年のご挨拶にふれ、私も二日の晩の夢枕で「東西思想の共生のため、自ら中村先生の世界思想史全四巻を英訳出版する」という夢をみた次第です。

＊吉原様は平成二十年五月十七日、急逝されました。
ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

東方学院　講師紹介

渡邊 寶陽
（立正大学名誉教授）

東方学院とは縁の遠い筆者でしたが、前田專學先生の慫慂により、去る平成十九年度より東方学院で「法華経を読む」を担当させて戴いております。筆者は中村元先生の講筵に列したことはありません。とはいえ、筆者の青年時代、中村先生は輝ける偉大な存在でした。先生が日本印度学仏教学会の学術大会の研究発表に耳を傾けながらも、サーラ双書『慈悲』（平楽寺書店刊）の校正刷りの束に目をやっていたお姿が今も目に焼き付いております。その後、立正大学の野村燿昌教授と、まだ公開には程遠い敦煌の遺蹟を訪問されたことがあり、親しい感じを戴いたことがあります。

さらに筆者が若年にして立正大学長に推された後、昭和六十一年、建て替えの工事中で狭苦しい学長室にお運び頂いて、対談をお願いしたことがありました。後にその対談が先生の『対談集』第二巻末尾に収録頂きました。世界的な学者でありながら、ごく気軽に対応して頂いて、逆に身のすくむ思いでありました。

思い起こしますと、日蓮教学専攻の筆者が「法華経」について講ずる契機になったのは、坂本幸男先生編『法華経の思想と文化』（法華経研究シリーズ／平楽寺書店刊）の小論文によるもののようです。（著名な先生方の御寄稿を頂いた（法華経研究シリーズ）は、その後十三巻を数えております。）その小論文の縁で、昭和六十一年、二十七週にわたり、NHKラジオ放送で「法華経をよむ」を担当し、幸いにもそのテキスト『法華経・久遠の救い』がNHK出版からNHKライブラリーに収録され、現在も書店に並んでおります。

平成二年五月からは、(財)「法華会」主催の「法華経」月例講話を担当。そのようなことがあって、平成十五年四月から翌年三月まで、毎月一回のNHKテレビ放送「こころの時代」で、「ブッダ永遠のいのちを説く」が草柳隆三氏を聞き手とする十二回の放送の機会に恵まれ、これまた同名でライブラリーの仲間入りをしました。

東方学院での「法華経を読む」の時間は、学院の性格もありますので、岩波文庫『法華経』（坂本幸男・岩本裕）をテキストにして、坂本先生の漢訳からの和訳を忠実に読むというスタイルをとることにしております。幸いにも聴講者の皆様と御一緒に、平成十九年度には上巻（序品第一から授記品第六まで）読破。今年度は中巻（化城喩品第七から従地涌出品第十五まで）の読破を目標にしております。来年度の下巻（如来寿量品第十六から普賢菩薩勧発品第二十八まで）読破によって、『法華経』全巻を聴講者の皆様と共に学ぶことが出来るものと胸躍って居る次第です。

崇敬申し上げる中村元先生のお導きによって、私たちにとっての基本である『法華経』の学習に沈潜できる悦びを感謝申し上げる次第です。

佐久間 留理子
（研究員）

本年度、名古屋教室（真宗高田派名古屋別院専修寺）では、「サンスクリット仏典講読」（中級）と「観音菩薩の説話と信仰」（初級）を行っています。「サンスクリット仏典講読」では、昨年度に引き続き、仏教説話集『アヴァダーナ・シャタカ』を、漢訳（撰集百縁経）とフランス語訳を参照しながら読んでいます。この説話集には、釈迦の前生のすがたが説かれています。これまでの授業では、釈迦が前生において「パドマカ」（蓮華王）であった時、捨身して赤魚となり、人々にその身体を布施したという話を読みました。現在は、釈迦が「シャシャ」（兎）であった時、その身体を焼いて仙人に供養したという話を読んでいます。毎回、講読は少しずつしか進みませんが、研究会員の方々との対話は、説話に関連する仏教美術やインドの人々の慣習にまで及びます。授業は、講読にとどまらず幅広いインド文化理解の場となっています。

また、「観音菩薩の説話と信仰」は、本年度より始まりました。この授業では『法華経』「普門品」や『カーランダ・ヴューハ』（大乗荘厳宝王経）を漢訳や英訳を使用して講読しています。前者の経典は、インドのみならず中国や日本等の東アジアにおいても盛んに信仰されたものです。また、後者の経典は、西北インドで編纂され、チベットやネパール等に伝わりましたが、特にネパールでは現在でも篤く信仰されています。授業では、これらの経典を講読するだけではなく、経典の内容に関連するインド、ネパール、東南アジアの仏教美術についても紹介しています。

名古屋教室の授業は、青々とした広い庭に隣接した座敷で、ゆったりとした雰囲気の中で行っています。研究会員の方々との会話もはずみ、時が経つのを忘れる程です。今後もできるかぎり継続してゆきたいと考えています。

研究員紹介

『寄帰伝』と私と東方のこと

加藤 榮司

唐代の義浄(六三五-七一三)のインド仏教僧伽の滞在記『南海寄帰内法伝』と私と東方研究会について書いてみます。寺生まれでもない私が宗門大学に入り夏期合宿の課本として出合ったのが『寄帰伝』でした。とにかく難しい。後から考えれば四六駢儷体の修辞と見慣れぬ戒律用語のせいだったのですが、大正蔵の原文、小野玄妙国訳、高楠順次郎英訳、江戸の慈雲飲光『解纜抄』を突き合わせてみても、全く歯が立たない。術語の意味は大正蔵索引の律部で語の見当を付け、用例を確認するより他ありませんでした（戒律辞典は今もない）。このとき熱心に『寄帰伝』と取り組んだのが当時助教授だった宮林昭彦（現浄土宗鎌倉光明寺法主）で、以後タイ国の上座部仏教僧伽への実地調査も含め、三十年余のお付き合いが今日まで続いています。

大学院時代にアルバイトで辞書造りにいっていた出版社社長の好意で、私は東方研究会に入ることが出来、中村先生は育英会に直接電話で免除職による返済猶予を掛け合って下さったのでした。「僕は若い研究者の味方だからね」（大先生が若輩、青二才の私のために…）。

纏まった枚数が掲載できる『東方』のお陰で私は義浄の伝記を編むことが出来、故阿部慈園さんは糸の切れた凧のような私を度々辞書や入門書の共同執筆者に誘ってくれました。ご厚情に多謝多謝です。一九九五年、北京の王邦維『寄帰伝』校注本と博士論文の出版は、他に『寄帰伝』研究者を全く想定していなかった私たちには衝撃でしたが、この優れたテキスト・研究の出現で幾つも誤訳が回避できたのも正直事実なのです。二〇〇四年、この際売れそうにない定本注釈は後回しにし、現代語訳のみを出版しました。やれやれこれで一安心だ。と、そんな中、第三十章の「洛州無影」が「周公測景台」という名物日時計であることを論証する王の論文と写真が送られてきたのです。あぁ誤訳！

『寄帰伝』研究には江戸の飲光、明治の高楠と続いた本朝の伝統があります。不肖私もこの法統を守ってゆくつもりです。

服部 育郎

研究員として原始仏教を専門としています。原始仏教とは、インドで仏教が成立した当時の、初期の時代の仏教をいいますが、基本資料としては、主に、パーリ語で書かれている文献類が中心となります。そうした文献を読んで感じることは、仏教の成立は今から二五〇〇年以前の昔ですが、そこで説かれている内容は、現代の私たちにも新鮮なメッセージを与えてくれるということです。ブッダは、苦しみを自覚し、その解決のために出家し修行しました。老病死の苦しみといいますが、こうした根本的な苦しみ（思い通りにならないこと）は、二五〇〇年昔の遠く離れたインドであっても、現代の日本であっても同じであり、やはり老病死の苦しみだということです。

原始仏教に関しては中村先生の膨大なご研究やご翻訳があります。先生のさまざまご研究を学ばせていただき、私は仏教研究の方向性を見つけ、さらには、研究をつづける力を、現在もいただき続けております。

また、一九九四年より二年間、東方研究会アジア諸国派遣留学生として、インドのプーナ大学で研究する機会をいただいたことは、とても貴重な経験になりました。当時、日々の生活に追われて、研究がなかなか進まなかった私は、仏教発祥の地においてまとまった研究をおこなう機会を与えていただいたのです。その際には、それまでの研究テーマであった、仏教の無我思想を思想史的に考察し、帰国後に、見直しとまとめをおこない、二〇〇〇年一月に、博士論文をプーナ大学へ提出することができました(A Study of Certain Concepts of Substantial Existence in Buddhism)。テーマは、無我といった場合の「無」の否定の種類、「我」の意味内容を、広い視野から探りながら、時代とともに「無我」の意味がいかに変化していったかを考察するものでした。こうしたテーマを探求するために、これからも、当研究会の恵まれた環境のもとで、さらなる研究に努力したいと考えております。

平成二十年上半期（一月～六月）

行事報告

東方学院ガイダンス

四月七日（月）午後六時より、東方学院のガイダンスが東京都千代田区にある神田神社明神会館（東京本校）及び大阪府茨木市にある浄土真宗大谷派茨木別院（関西教室）において開催されました。

東京本校のガイダンスにおいては、最初に前田専學東方学院長により創立者中村元博士のビデオを鑑賞しながら、東方学院の理念や学院全般についての説明が行われ、続いて各講師の紹介、講師による講義内容の説明などが行われました。

参加者は前田学院長をはじめとする約三十名の講師と、研究会員諸氏、合わせて約百名でした。

関西教室

東京本校

研究員総会

於 学士会分館正面玄関　平成20年6月7日

六月七日（土）、東京都文京区にある学士会分館において第二回研究員総会が開催されました。

この総会は当会の更なる発展のため、研究員が一同に会し交流を深めつつ互いに意見交換を行うことを目的として企画されたものです。当日は約三十名の研究員が出席し、前田理事長の挨拶に始まり、奈良常務理事をはじめとする執行部より研究員に対する通達・要請事項が伝えられました。また、その後、研究会の運営などについて研究員間で活発な議論が交わされました。

研究員のコラム　第２回

閑話本題

「龍」の棲み着く日本

鈴木一馨（研究員）

諸橋轍次の『大漢和辞典』は、中国で『漢語大字典』『漢語大詞典』が出版されるまで、単なる漢和辞典ではなく最大の漢字・漢語辞典でもあった。この十二巻目に「龍」の項目がある。いろいろと「龍」の字義が載せられているのだが、中国の人々の中で一般的に理解されていながら漏れている字義がある。それはなにかというと「気のながれ」である。

日本人には「龍」が「気のながれ」を意味すると言ってもあまりピンとは来ないのだが、どういう場面でそれが理解されているのかというと、風水の現場においてである。日本では流行りの風水でようやく「気のながれ」ということが言い出されてきていて、「風水師」を名乗る人達はみな一様に「気のながれ」をそのまま言っている。ところが本家の中国では、風水の現場で「気のながれ」などという表現はまずお目にかからない。なぜならば「気」は目に見えないから、「こちらからあちらへ気がながれている」と説明したところで言われた方は全く理解できない。そこで、これを視覚的（実感的）に理解できるように「ここに龍が（通って）いる」と説明するのである。このような説明法は、風水に「気のながれ」の理解が生じた九世紀ごろにはすでに始まっており、「龍」は風水における中心的な理念となっている。龍は空中を泳ぐとき、決してピンと真っ直ぐにはならず、うねうねと蛇行しながら泳ぐ。だから「龍」の上に建ち並ぶ建物は、決して一直線上ではなく、緩く蛇行しながら建ち並ぶことになる。この蛇行はちゃんと日本にもやって来ていて、多くの禅宗寺院の中心伽藍の配置に見られる。鎌倉時代に禅宗が日本に伝えられたとき、ちょうどその伽藍構成法となっていた風水が共に伝えられたのである。時折、門前に二つの井戸や数本の樹木が対になって植えられている禅寺があるが、それこそが龍の目や髭なのだ。

あまり知られていないが、日本にも多くの龍が千年近く棲み着いているのである。

財団法人東方研究会からのお知らせ

会員募集のお知らせ

当財団では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会員と、当財団への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

◇普通会員◇

普通会員の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当財団主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

年会費　七千円

◇賛助会員◇
◇維持会員◇

当財団では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当財団の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。

賛助会費　一口　一万円
維持会員　一口　五万円

＊詳細は財団法人東方研究会事務局までお問い合わせください。

『東方』第二十三号 刊行

三月三十一日、当財団の機関紙『東方』の最新号が刊行されました。今回は論考六篇に加え、昨年開催された鎌倉夏期宗教講座の講演録などの各種連載記事を掲載致しました。

なお、本誌は会員（研究会員を除く）の皆様にお送りしているほか、各種研究機関・図書館等にも納められています。頒布可能なバックナンバーもございますので、詳細は事務局までお問い合わせください。

第二十三号　表紙写真

【執筆者】

・前田 專學（東方学院長）
・木村 清孝（国際仏教学大学院大学学長）
・定方 晟（東海大学名誉教授）
・茨田 通俊（東方研究会研究員）
・常磐井 慈裕（東方研究会研究員）
・龍口 恭子（東方学院講師）
・入井 善樹（光教寺住職）
・森 和也（東方研究会研究員）

（敬称略）

第十八回 鎌倉夏期宗教講座のご案内

来る八月二十四日（日）、鎌倉市の鶴岡八幡宮・直会殿において、鶴岡八幡宮のご協力と朝日新聞社のご後援により、第十八回目となる鎌倉夏期宗教講座を開講いたします。

今回は、薗田稔先生（京都大学名誉教授・秩父神社宮司）と下田正弘先生（東京大学教授）を講師にお招きし、それぞれのご専門から「いま、「いのち」を考える」と題する講演が行われます。

本講座の受講を希望される方は、直接、会場にお越し下さい（事前のお申し込みは不要です）。ただし、先着順にて定員二〇〇名になり次第締め切らせていただきます。会費は当日会場にて申し受けます。詳細は当財団事務局までお問い合わせください（なお、電話での問い合わせは、月・木の正午以降にお願いいたします）。

＊鶴岡八幡宮へのお問い合わせはご遠慮願います。

講座概要

開　場　十二時三十分（開演十三時）
終　了　十七時
参加費　二千円（当日会場にて頂戴いたします）

第九回 酬佛恩講合同講演会のご案内

来る十一月二十九日（土）午後、奈良市西ノ京の法相宗大本山薬師寺において、同寺のご後援の下、東方学院と酬佛恩講共催で第九回目となる合同講演会を開催いたします。本講座の受講を希望される方は、葉書またはファックスにて当財団事務局までお申し込みください（お名前とご連絡先を必ず記載してください）。

新任研究員紹介

本年四月一日付で左記の三名が新たに当財団の研究員として採用されましたのでここにご報告申し上げます。

北田　信（きただ　まこと）
マーティン・ルター大学大学院（ドイツ）修了・博士（インド学）
研究テーマ　アーユルヴェーダ
インド古典音楽理論

佐々木　一憲（ささき　かずのり）
東京大学大学院単位取得満期退学
研究テーマ　インド仏教中観派

高柳　さつき（たかやなぎ　さつき）
東京大学大学院単位取得満期退学
研究テーマ　日本仏教（中世禅思想史）

交通のご案内（東京本校）

鉄道各線の最寄駅（徒歩十分以内）

JR東日本
中央線／総武線　御茶ノ水駅［聖橋口］

つくばエクスプレス
秋葉原駅［A3出口］

東京メトロ
銀座線　末広町駅［3番出口］
千代田線　新御茶ノ水駅［B2出口］
丸の内線　御茶ノ水駅［郵便局口］

＊駐車場・駐輪場のご用意はございません。

なお、関西地区教室・中部地区教室に関するお問い合わせは、東京本校までお願いいたします。

東方だより　第十二号（平成二十年八月一日）
編集／発行　財団法人東方研究会
（東京本校）東京都千代田区外神田二-十七-二 延寿お茶の水ビル 四階
〒一〇一-〇〇二一　TEL〇三-三二五一-四〇八一

無断転載・複製を禁ず